

八代集の「ほのかなり」について ——形容動詞と和歌(2)

はじめに

「ほのかなり」という形容動詞は、語基「ホノ」と状態性質を持つ接尾語「カ」との組み合わせによって形成された形容動詞であるとされている。『時代別国語大辞典 上代編』は、「ほのか」「髣髴・側」という語形で立項し、「かすかに。ほんやりと」という語義を記す。ただし、品詞については副詞としている。これに対し、『日本国語大辞典 第二版』は、「ほのか」「仄―・側―」という語形で形容動詞として立項した上で、次のように語義を記述している。

- ① わずかにそれとわかるさま。分明でないさま。
- ② 物の形、音などが、わずかに見えたり、聞こえたりするさま。
- ③ 光、色などが、はっきりしない程度で、わずかに見えるさま。ほんのり。うっすら。

謝 静

- ① 心、意識がほんやりしているさま。かすかに認識するさま。程度が、はっきりしないくらいにわずかなさま。いささか。ちよつと。しばし。
- ②

本稿では、このような辞書の記述を参考にしながら、八代集の和歌に用いられた「ほのかなり」の意味用法について、一首一首用例を検討しながら、概観を試みたい。

一

八代集の用例について検討するに先立って、上代に成立した歌集である『万葉集』の「ほのか」の用例を点検し、それがどのように使用されているかについて、簡単に確認しておきたい。^{〔1〕}『万葉集』には「ほのか」の用例は八例見出せる。そのうち二例は同じ歌と考えられるので、実質的な用例は七例である。部類別に見ると、雑歌は二例、挽歌は二例、相聞往来歌は四例（うち重複があるので実質

三例）が収載されている。以下、部類ごとに概観を試みる。

《雑歌》

- ① 梶の音そほのかにすなる海人娘子沖つ藻刈りに舟出すらしも
へに云ふ、「夕されば梶の音すなり」 （巻第七・一一五二）
- ② 玉かぎるほのかに見えて別れなばもとなや恋ひむ逢ふ時まで
は （巻第八・一五二六）

①の歌では、「梶の音」が「ほのかに」聞こえることから、舟が出航することを推測している。②の歌は、左注に「右、天平二年七月八日の夜に、帥の家に集会ひて」とあることにより、七夕の歌として詠まれたことが知られる。「ほのかに」は「見ゆ」にかかって、視覚的な用法ともとれるが、実際には、牽牛と織女の二星がわずかに逢つてすぐに離れてしまう、その逢瀬の短さと切なさを表現している。

《挽歌》

- ① うつせみと 思ひし時にへに云ふ、「うつせみと思ひし」
取り持ちて 我が二人見し 走り出の 堤に立てる 梶の木
こちこちの枝の 春の葉の 繁きがごとく 思へりし 妹には

あれど 頼めりし 児らにはあれど 世の中を 背きし得ねば
かぎろひの もゆる荒野に 白たへの 天領巾隠り 鳥じもの
朝立ちいまして 入日なす 隠りにしかば 我妹子が 形見に
置ける みどり子の 乞ひ泣くごとに 取り与ふる ものしな
ければ 男じもの わき挟み持ち 我妹子と 二人我が寝し
枕づく つま屋の内に 昼はも うらさび暮らし 夜はも 息
づき明かし 嘆けども せむすべ知らに 恋ふれども 逢ふよ
しをなみ 大鳥の 羽易の山に 我が恋ふる 妹はいますと
人の言へば 岩根さくみて なづみ来し 良けくもそなき う
つせみと 思ひし妹が 玉かぎる ほのかにだにも 見えなく
思へば （巻第二・二二〇）

①の歌では、「ほのかに」は先の②と同様に、「見ゆ」にかかっている。この歌では、亡くなった妻を羽易の山中に尋ねて行ったが、そのかいもなく、妻の姿を見ることができなかった嘆きを詠む中で、妻の姿がせめて「ほのかに」見えて（現れて）ほしかったが、それもかなわなかったという悲しい思いを表現している。

- ② この月は 君来まさむと 大船の 思ひ頼みて いつしかと
我が待ち居れば もみち葉の 過ぎて去にきと 玉梓の 使ひ
の言へば 螢なす ほのかに聞きて 大地を 炎と踏みて 立
ちて居て 行くへも知らず 朝霧の 思ひ迷ひて 丈足らず

八尺の嘆き 嘆けども 験をなみと いくにか 君がまさむ
と 天雲の 行きのまにまに 射ゆ鹿の 行きも死なむと 思
へども 道の知らねば ひとり居て 君に恋ふるに 音のみし
泣かゆ
(巻第十三・三三四四)

②は、訪れを待っていた恋人の死を嘆いた歌で、「ほのかに」は
恋人が死んだという噂を、わずかに聞き知ったことを示している。
恋人が死んだ消息すらもはつきりと詳しく聞くことができなかった
嘆きを表現している。

〈相聞往来歌〉

① 朝影に我が身はなりぬ玉かきるほのかに見えて去にし児故に
(巻第十一・二三九四) (巻第十二・三〇八五)

② 切目山行きかふ道の朝霞ほのかにだにや妹に逢はざらむ
(巻第十二・三〇三七)

③ 志賀の海人の釣し灯せるいざり火のほかに妹を見むよしも
がな
(巻第十二・三二七〇)

①の歌でも「ほのかに」は「見ゆ」にかかっている。新編全集は、
この「ほのかに」について、「物の見え方、聞え方が不十分である
ことを示す副詞」として、副詞として扱っている。語義的には恋人

の姿がぼんやりとしか見えなかったことを示すが、わずかな逢瀬を
嘆く切ない思いがこめられていると考えられる。

②の歌では、「ほのかに」は「逢ふ」にかかっている。妹との逢
瀬がかなわないことを前提として、せめてわずかな逢瀬でもよいか
ら実現しないかという願望を表現している。「切目山行きかふ道の」
朝霞は「ほのかに」を導く序詞となっている。

③の歌では、「ほのかに」は「見る」にかかっている。「家に残し
てきた妻」(新編全集)にわずかにでも会いたいという気持ちを表
現している。「志賀の海人の釣し灯せるいざり火の」は、「ほのかに」
を導く序詞である。

以上、『万葉集』における「ほのかに」の用例を一首一首読ん
できた。特徴としてまず挙げられるのは、用例が連用形「ほのかに」
に限られるという点である。この「ほのかに」を、新編全集は、『時
代別国語大辞典 上代編』と同様に、副詞として扱っているが、こ
の語の通時的な使われ方から見て、形容動詞として扱っても不当と
は言えないであろう。

「ほのかに」は、『日本国語大辞典 第二版』が、「物の形、音
などが、わずかに見えたり、聞こえたりするさま」という語義を記
す(①の④)ように、視覚的にも聴覚的にも用いられる言葉である
が、『万葉集』では、「見ゆ」にかかる用例が3例、「音が」す」が
1例、「聞く」が1例、「逢ふ」が1例、「見る」が1例であり、か
かっていく言葉から見ると、視覚的な用法が優勢であることがわか

る。ただし、それは単なる見方、見え方の問題ではなく、「逢ふ」にかかる場合に通ずるような、逢瀬の短さ、はかなさを比喩的に示す要素が看取される。

枕詞・序詞などからのつながりの観点からみると、「玉かぎる」(3例)「蛩なす」「朝霞」「いざり火の」と共起していて、ここでも視覚的な用法が主流であることが知られる。

二

『古今集』に始まり『新古今集』まで、八代集における「ほのかなり」の用例について、次に概観したい。⁽²⁾ 各集の部立に用いられた「ほのかなり」の使用数は次ページの表一の通りである。

歌集ごとの用例数では、それぞれの収録歌数を勘案すると、『拾遺集』と『金葉集』がやや多いようにも見えるが、特筆すべき傾向は看取されない。

部立別にみると、恋の部立は十五例があり、全体に占める割合は五十二パーセントで、『金葉集』補遺歌の一首も内容的には恋の歌であることを加味すると、他の部立に比べ、恋の歌の割合が相対的に高いことが知られる。四季の部立は十例で、その内、夏の歌が五例、秋の歌も五例で、春と冬の用例が見当たらないのは注目すべきであろう。他に雑歌の部立は二例、釈教歌が一例で、人事詠という括りから見ても、「ほのかなり」が恋歌に相対的に多用されている

ことがわかる。以下、四季、恋、その他の順に、和歌を個別的に検討していくこととする。

(1) 四季の歌

「ほのかなり」の用例が四季の部に収められている歌集は、『後撰集』、『拾遺集』、『金葉集』、『詞花集』、『千載集』、『新古今集』であるが、用例数で見ると、平安後期の歌集に多く用いられていることがわかる。また、前述のとおり、用例は夏部と秋部にそれぞれ五例と集中している。以下、夏歌と秋歌に分けて、検討を加える。

〈夏歌〉

- ① 髣髴にぞ鳴渡なる郭公み山を出づる今朝の初声
(拾遺集・夏・一〇〇・坂上望城・「天曆御時歌合に」)
- ② 郭公くものたえまにもる月の影ほのかにも鳴きわたるかな
(金葉集・夏・一二三・皇后宮式部・「月前郭公といへる事をよめる」)
- ③ 大井川いくせ鵜舟のすぎぬらんほのかになりぬ篝火のかげ
(金葉集・夏・一五一・中納言雅定・「実行卿家歌合に、鵜河の心をよめる」)
- ④ ほととぎすしのぶるころは山びこのこたふる声もほのかにぞ

表一

	合計	新古今集	千載集	詞花集	金葉集	後拾遺集	拾遺集	後撰集	古今集	
夏歌	5		2		2		1			
秋歌	5	2	1	1				1		
恋歌	15	5	2			1	5	1	1	
雑歌	2				1	1				
釈教歌	1	1								
補遺歌	1				1					
合計	29	8	5	1	4	2	6	2	1	

する

（千載集・夏・一五〇・加茂重保・「郭公のうたとてよめる」）

- ⑤ 夕月夜いるさの山の木がくれにはのかになのほととぎすかな

（千載集・夏・一六三・権大納言宗家・「郭公のうたとてよみ侍りける」）

この五首で、「ほのかなり」は、すべて連用形で用いられ、動詞

にかかっている。

どの動詞にかかっているかという観点から見ると、「鳴く」が二例、「なる」が一例、「こたふ」が一例、「なのる」が一例である。「鳴く」は郭公の鳴くことを意味し、「こたふ」は郭公の鳴く声の山彦が主語であり、「なのる」も郭公が鳴くことを擬人的に表現している。五例中四例が、郭公の鳴くさまを「ほのかに」と表現したものである。

残りの一例は、鵜船の篝火の光が、船が遠ざかるにつれて「ほのかに」「なる」さまを表現している。

このように「ほのかに」が修飾する語ならびにその意味内容を、視覚・聴覚の別から見ると、視覚的なものが一例、聴覚的なものが四例で、『万葉集』の用例で見られた傾向とは対照的に、聴覚的な用法が優勢であることがわかる。

その一方で、②の歌では、「月前郭公」という題のもとで、雲の絶え間に漏れる月影についても、「ほのかに」と表現していて、「月光と時鳥の声の重なりを繊細な感覚で詠」んでおり（新大系）、視覚と聴覚にまたがる二義的な用法が見られることには注目される。また、⑤の歌でも、「上句は夕景の薄暗さ、視覚的な「ほのかさ」を序詞的に叙し、転じて聴覚の「ほのかさ」に接続している」（新大系）と評されるように、視覚と聴覚とを重ね合せようとする工夫が見られる。

次に、助詞との共起から見ると、「髣髴にぞ鳴き渡なる」「ほのか

にぞする」と、係助詞「ぞ」で「ほのかに」を強調していたり、「ほのかにも鳴きわたるかな」「ほのかになるほとぎすかな」というように、「かな」と共起して、ほのかなさまについての詠嘆を示すなど、「ほのかなり」が示す状態・情景に対する好尚が看取される。

〈秋歌〉

- ① 秋風の草葉そよぎて吹くなべにほのかにしつるひぐらしの声
(後撰集・秋上・二五三・よみ人しらず・「題しらず」)
- ② 山城の鳥羽田の面をみわたせばほのかにけさぞ秋風はふく
(詞花集・秋・八二・曾禰好忠・「題不知」)
- ③ 秋の夜の心をつくすはじめとてほのかに見ゆる夕月夜かな
(千載集・秋上・二七四・権大納言実家・「月の歌あまたよみ侍ける時よみ侍ける」)
- ④ 小倉山ふもとの野辺の花すすきはほのかに見ゆる秋の夕暮
(新古今集・秋上・三四七・読人しらず・「題しらず」)
- ⑤ ほのかにも風は吹かなん花すすきむすばほれつつ露にぬるとも
(新古今集・秋上・三四八・女御徽子女王・「題しらず」)

この五首でも、「ほのかなり」は、すべて連用形で用いられ、動詞にかかっている。

どの動詞にかかっていくかという観点から見ると、「(風が)吹く」が二例、「見ゆ」が二例、「(声が)す」が一例となっており、これを、視覚・聴覚の別から見ると、視覚的なものが四例、聴覚的なものが一例で、夏歌で見られた傾向とは異なっており、視覚的な用法が優勢であることがわかる。

助詞との共起から見ると、やはり「ぞ」「かな」との共起が注目される。「ほのかにけさぞ秋風はふく」「ほのかに見ゆる夕月夜かな」と、夏歌と同様に、強意の「ぞ」、詠嘆の「かな」と共に用いられる用例が見出せるのである。

そうした共起関係に加え、「ほのかにしつるひぐらしの声」「花すすきはほのかに見ゆる秋の夕暮」「ほのかにも風は吹かなん」というように、一首の主題に関わる部分に「ほのかに」を含む情景が位置しており、ほのかに聞こえるもの、ほのかに見えるものに対する好尚が、やはり夏歌と同様に看取される。

『万葉集』では、「ほのかなり」は専ら人事詠において用いられていた。これに対し、八代集の四季部では、自然の描写に用いられるようになっており、そこに、ほのかなものへの好尚や美意識が成立していることが知られるのである。

(2) 恋の歌

八代集の恋部において、「ほのかなり」の用例が見られる部立は、

次の通りである。

『古今集』恋一（一首）

『後撰集』恋二（一首）

『拾遺集』恋二（三首）と恋五（二首）

『後拾遺集』恋一（一首）

『千載集』恋一（二首）

『新古今集』恋一（三首）と恋五（二首）

全十五首のうち、恋一が七首、恋二が四首と、恋の前半にあたる部分に収められた用例が顕著に多い。残りの用例四首は、すべて恋五で、これは恋の終末にあたる。

では、それらの恋歌で「ほのかなり」がどのように用いられているのかについて、具体的に考察してみたい。なお、新大系所収の『金葉集』補遺歌は、北村季吟『八代集抄』本等では恋上に収められているので、これも合わせて検討することとする。

恋歌における「ほのかなり」は、その多くが序詞あるいは比喩と関連して用いられている。たとえば、

山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

（古今集・恋一・四七九・貫之・「人の花摘みしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、後に、よみて、遣はしける」という用例では、「ほのかにも」という句は、「山ざくら霞の間よりほのかにも見て」というつながりにおいて、「山桜を霞の間よりほのかに見る」という意味を表す一方で、「ほのかにも見てし人こそ

恋」というつながりにおいては、花摘みをしていた女性の姿を「ほのかに見た」という意味を表している。前者は序詞という修辭における意味であり、後者は恋歌の主題に関わる意味である。

「ほのかなり」が恋の歌において右のように使われていることを踏まえ、以下の検討においては、まず恋の主題に関わる「ほのかなり」の意味・用法を確認・概観し、ついで序詞・比喩等の修辭技法における「ほのかなり」の意味・用法を見ていくこととする。

〈恋の主題に関わる「ほのかなり」〉

○「見る」にかかる用例

「ほのかに：見る」という用例は、次の五例。その表す意味は、女の姿をほのかに見る意と、男女のほのかな逢瀬の意とに大別される。

- ① 山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ
（古今集・恋一・四七九・貫之・「人の花摘みしける所にまかりて、そこなりける人のもとに、後に、よみて、遣はしける」）
- ② よそにても有にし物を花薄ほのかに見てぞ人は恋しき
（拾遺集・恋二・七三二・よみ人しらず・「女に遣はしける」）
- ③ 志賀の海人の釣にともせる漁火のほのかに妹を見るよしも哉

〔拾遺集・恋二・七五二・よみ人しらず・「題しらず」〕

④ 志賀の海人の釣にともせる漁火のほのかに人を見るよしも哉

〔拾遺集・恋五・九六八・坂上郎女・「題しらず」〕

⑤ 片岡の雪まにねざす若草のほのかに見てし人ぞこひしき

〔新古今集・恋一・一〇二二・曾禰好忠・「題しらず」〕

右のうち、①⑤は、女の姿をほのかに見たことを詠ずる。

これに対し、②③④は、男女の逢瀬を意味する。そのうち、②③は、男が女との逢瀬を遂げる意。④は男の来訪を表している。

④の歌について、新大系は、③の重出歌として扱っていて、③との歌意の差異に特に注目してはいないが、③は恋二に収められていて、「ほのかに妹を見るよしもがな」という本文で男の立場から女との逢瀬を希求しているのに対し、④は恋五に収められ、「ほのかに人を見るよしもがな」という本文で、女の立場から男の来訪を希求しているという違いがあるので、一応別の歌として扱うべきであろう。

⑥ ほのかにも我を三島の芥火のあくとや人の訪れもせぬ

〔拾遺集・恋五・九七六・よみ人しらず・「題しらず」〕

⑦ 宵のまにほのかに人を三日月の飽かで入にし影ぞ恋しき

〔金葉集・補遺歌・六九二・藤原為忠・「寄三日月恋をよめる」〕

この二首は、「三島」「三日月」に「見（る）」を掛けている。⑥の「見る」は逢瀬を示す用法で、男が自分に逢った意を表している。

⑦は新大系の底本にはなく、『八代集抄』に見える歌で、「見る」の意味については、次のように説が分かれる。

新大系は、

宵のうちにちらつとあなたに会いはしたものの、ちょうど三日月がすぐに入って惜しまれるように、もの足りないうちに別れてしまったあなたの姿が恋しいのですよ。

と解釈し、短い逢瀬を読み取っている。

一方、『八代集抄』は、

宵のまぎれにほの見えて、あかで入かくれたる人を、三日月にそへてよめりし心也。

として、垣間見説に立っている。⑦歌は、先述したように『八代集抄』では恋上に収められているが、前後の配列からはどちらの説が正しいと判断できない。けれども、「宵のま」という時間帯を踏まえると、垣間見の歌として解するのが穏当だろう。

次に「見る」を用いてはいないが、それに準ずる意味を表していると判断される「ほのかなり」の用例を見てみよう。

⑧ 追風に八重の潮路をゆく舟のほのかにだにも逢ひ見てしかな

〔新古今集・恋一・一〇七二・権中納言師時・「鳥羽院御時、上のをのこども、風に寄する恋といふ心をよみ侍けるに」〕

⑨ 濁り江のすまんことこそかたからめいかでほのかに影を見せまし（新古今集・恋一・一〇五三・読人しらず・「題しらず」）

⑩ はかなしや枕さだめぬうたた寝にほのかにまよふ夢の通ひ道（千載集・恋一・六七七・式子内親王・「百首歌よみ給ける時、恋歌」）

この三首の傍線部は、すべて男女のほのかな逢瀬を意味している。⑧はせめてもほのかな逢瀬を遂げたいという願望を詠じ、⑨もまた何とかして相手に逢いたいという願望を表現している。⑩は、夢の中で、逢えるかどうか定かでない逢瀬を意味している。

このうち、⑨については、窪田空穂『完本新古今和歌集評釈』、久保田淳『新古今和歌集全注釈』のように、「見せ」の主語を女ととり、

・ どうかして水に映る影のように、あなたの姿を見せてもらいたいことだ。（完本評釈）

・ 何とかしてちらりと姿を見せてほしい。（全注釈）

と解する説があるが、「まし」の意味を踏まえれば、新大系が、あなたと住むことはむづかしいとしても、ちよつとでよい逢いたいものだ。

と、詠作主体である男を主語として読解するのに従うべきだろう。

○「見ゆ」にかかる用例

この用例は次の二首。①は、男の立場から、女とのほのかな逢瀬を表現し、②は、女の立場から男とのほのかな逢瀬を意味している。

① 夢よりもはかなきものは陽炎のほのかに見えし影にぞありける（拾遺集・恋一・七三三・よみ人しらず・「女に遣はしける」）
② 稲妻は照らさぬよるもなかりけりいづらほのかに見えしかげろふ（新古今集・恋五・一三五四・相模・「題しらず」）

先に検討したように、「ほのかに：見る」には、女の姿をほのかに見る意の用例と、男女のほのかな逢瀬を意味する用例があったが、右の二首の「ほのかに：見ゆ」の用例は、「ほのかに：見る」の後者の用例に照応するものであると言える。

③ 藻屑火の磯間を分くるいさり舟ほのかなりしに思ひそめてき（千載集・恋一・六四五・藤原長能・「女につかはしける」）

この歌には、「見ゆ」は用いられていないが、「ほのかなりし」は「ほのかに見えし」にほぼ等しいと判断される。新大系が、「初めてかいま見た人へのほのかな慕情」と解説するように、女の姿がほのかに見えた意を表している。

○「知らず」にかかる用例

・ほのかにも知らせてしがな春霞かすみのうちに思ふ心を

(後拾遺集・恋一・六〇四・後朱雀院御製・「東宮とまうしける時、故内侍の督のもとにはじめてつかはしける」)

自分の恋の思いを相手に「ほのかに」知らせる意を表している。

「十三歳の東宮が二歳年上の妃に贈ったういういしい恋歌」(新大系)である。

○「隠す」にかかる用例

・漁火の夜はほのかにかくしつ有へば恋の下に消ぬべし

(後撰集・恋二・六八一・藤原忠国・「しのびて逢ひわたり侍ける人に」)

詞書に事情が記されるように、「しのびて逢ひわた」るさまを、「ほのかに隠しつ」と表現している。忍ぶる恋の歌である。

○「声」の述語となる用例

・雲井よりとを山鳥のなきてゆく声ほのかなる恋もするかな

(新古今集・恋五・一四一五・躬恒・「題しらず」)

「声ほのかなる恋」とは、相手の声が「ほのかに」聞こえるような恋の意を表す。

新大系は、この歌について、次のように記述している。

題でいえば「聞く恋」で、声を聞いて慕っているばかりのとりとめのない恋。

この解説は、この「雲井より」の歌を、女の声を聞くばかりで逢うことができない男の立場の歌とみなしているのだろう。

『新古今和歌集全注釈』が、「恋愛としては初期の段階であるから、恋一あたりに入れられてもよかった歌である」と述べ、『完本新古今和歌集評釈』が、「恋もするかな」の語釈として、「進展しない恋をしていることよ」と記しているのも、同じ理解であると推定される。

しかしながら、この歌の直前には、

・逢はずしてふる比ほひのあまたあれば遥けき空にながめをぞする(新古今集・恋五・一四一三・光孝天皇御歌・「題しらず」)

・思ひやる心も空に白雲の出で立つかたを知らせやはせぬ

(同・一四一四・兵部卿到平親王・「女のほかへまかるを聞きて」)

というように、男の立場から、交際している女との疎遠を嘆く歌が並び、直後にも、同様の主題の歌が、

・雲居なる雁だになきて来る秋になどは人のをとづれもせぬ

(同・一四一六・延喜御歌・「弁更衣久しくまゐらざりけるに、賜はせける」)

・春ゆきて秋までとやは思ひけんかりにはあらず契し物を

(同・一四一七・天曆御歌・「斎宮女御、春ごろまかり出でて、久しうまゐり侍らざりければ」)

・初雁のはつかに聞きしことつても雲路に絶えてわぶる比かな

(同・一四一八・西宮前左大臣・「題しらず」)

というように続いているのを踏まえれば、当該歌もまた、一度は親しくしていた女が、何かの事情で疎遠になってしまったことを嘆く男の歌として解するのが、前後の配列から見ても、「なきてゆく」の示す方向からも妥当だろう。

「ほのかなり」は、この歌において、相手の女の声がほのかに聞こえるという文字通りの意味に留まらず、相手との心理的な距離を暗示している。

《修辞技法における「ほのかなり」》

次に序詞などの修辞技法に、「ほのかなり」がどのように用いられているかを概観したい。ここでは、作者名と詞書を省略することとする。

① 山ざくら霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

(古今集・恋一・四七九)

② 漁火の夜はほのかにかくしつ有へば恋の下に消ぬべし

(後撰集・恋二・六八一)

③ 志賀の海人の釣にともせる漁火のほかに妹を見るよしも哉

(拾遺集・恋二・七五二)

④ 夢よりもはかなきものは陽炎のほかに見えし影にぞありける

(拾遺集・恋二・七三三)

⑤ 志賀の海人の釣にともせる漁火のほかに人を見るよしも哉

(拾遺集・恋五・九六八)

⑥ 藻屑火の磯間を分くるいさり舟ほのかなりしに思ひそめてき

(千載集・恋一・六四五)

⑦ 片岡の雪まにねざす若草のほかに見てし人ぞこひしき

(新古今集・恋一・一〇二二)

⑧ 追風に八重の潮路をゆく舟のほかにだにも逢ひ見てしかな

(新古今集・恋一・一〇七二)

⑨ 雲井よりとを山鳥のなきてゆく声ほのかなる恋もするかな

(新古今集・恋五・一四一五)

右の九首の和歌では、序詞によって「ほのかなり」を導く技法が用いられている。その序詞とのつながりの文脈で、「ほのかなり」は、⑨を例外として、専ら視覚的イメージとの関わりにおいて用い

られている。この理由としては、「見る」「隠す」「見ゆ」という視覚に関わる言葉につながっていく歌が多いということがあげられよう。

これらの歌は、総じて『万葉集』の、

志賀の海人の釣し灯せるいざり火のほのかに妹を見むよしもが

な
(巻第十二・三二七〇)

の系譜を引いた歌であると見られるが、その中には、視覚的にも聴覚的にもより洗練されたものや、動きを伴ったものも見られるなど、四季歌の用例に看取された、ほのかに見えるもの、ほかに聞こえるものに対する好尚や美意識が、こうした修辭的表現にも反映していることが窺える。

⑩ ほのかにも知らせてしがな春霞かすみのうちに思ふ心を

(後拾遺集・恋一・六〇四)

⑪ 宵のまにはほのかに人を三日月の飽かで入にし影ぞ恋しき

(金葉集・補遺歌・六九二)

⑫ 濁り江のすまんことこそかたからめいかでほのかに影を見せまし
(新古今集・恋一・一〇五三)

⑬ 稲妻は照らさぬよるもなかりけりいづらはほのかに見えしかげろふ
(新古今集・恋五・一三五四)

これらの歌では、序詞のように比喩的につながるのではなく、視

覚的イメージと「ほのかなり」が、縁語のように響き合って、一首を構成している。そこでは、「ほのかなり」が一首の核となって機能していると見られる。

(3) その他の歌

① 世の中を何にたとへむ秋の田をほのかに照らすよひのいなづま
(後拾遺集・雑三・一〇一三・源順・「世の中を何にたとへむといふ古言を上置きてあまたよみ侍りけるに」)

② 木の間もる片割れ月のほのかにもたれか我身を思ひいづべき
(金葉集・雑上・五三六・僧正行尊・「山家にて有明の月を見てよめる」)

③ わが心なをはれやらぬ秋ぎりにほのかに見ゆる在曙の月
(新古今集・釈教歌・一九三四・権僧正公胤・「観心如月輪若在輕霧中の心を」)

① 歌は、「この世の無常を電光に譬えた歌」(新大系)である。ここでは、「ほのかに」に稲の「穂」を掛けながら、単なる稲妻へのたとえではなく、字数を費やして秋の田の情景として比喩を組み立てている。「ほのかに」は、ここではわずかな間という意味を表している、無常の比喩の核となっている。

②歌は、「木の間もる片割れ月の」が「ほのかに」を導く序詞であるが、「山家にて有明の月を見て」という囑目の景とも一致して、四季の歌に通い合う好尚が看取される。

③歌は、詠作主体が、自分の悟り切れない心を具体化し、晴れきらない秋霧の中にほのかに見える有明の月のようだと、視覚イメージに託して詠んだもので、ここでも「ほのかに」は一首の比喩の核となっている。

おわりに

上代における『万葉集』の中に用いられた「ほのか(なり)」は、雑歌、挽歌、相聞往来歌に用例が見られ、視覚的な意味において多く用いられ、切ない心情を表すことが多い。

平安時代の八代集において「ほのかに」は、四季の歌においては、夏・秋に限って用例が見られ、「ほととぎすの声」、「ひぐらしの声」、「夕月」、「秋風」のように、季節を代表する景物を、聴覚的・視覚的に表現していて、ほのかな情景に対する好尚や美意識が看取できる。それとの関連において、「ぞ」「かな」といった助詞との共起も注目される。

同じ八代集の恋の歌では、序詞などの比喩表現を中心に、ほのかに見る(見える)情景と、ほのかに女を見る、ほのかに逢瀬を遂げる、といった恋の主題とを結びつける用例が多い。そこでは、「ほ

のかに」が一首の発想・表現の核となっている様子が看取される。雑歌など、その他の歌においても、恋の歌と同様の傾向が指摘できる。

注

(1) 『万葉集』の引用は、新編日本古典文学全集による。以下、同叢書に言及する際は、「新編全集」と略す。

(2) 八代集の引用は、新日本古典文学大系による。以下、同叢書に言及する際は、「新大系」と略す。

(3) 和歌文学大系『金葉和歌集 詞花和歌集』、『八代集抄』も同様に扱っている。

(4) ④歌の、直前・直後の歌から見ても、④は、男の来訪のなさを嘆き男の訪れを希求する歌として理解するのが妥当である。
・ 潮満てば入ぬる磯の草なれや見らく少なく恋ふらくの多き
 (拾遺集・恋五・九六七・坂上郎女・「題知らず」)
・ 岩根踏み重なる山はなけれども逢はぬ日数を恋ひやわたらん
 (同・九六九・坂上郎女・「題知らず」)

(しえ じん 本学大学院博士後期課程学生)